

第4章 イエメンと諸国間の歴史的絆

重要な真実（注1）、それは紀元前4,000年前にアラビア諸国の南部（イエメン）からの移住の様々な波がエジプトに到達したことである。そしてこれ等移住者達は、少なからぬ文化レベルにあった。

（注1）「イエメン、その過去と現在」 Dr.アハマド・ファフリー著 P.5

紀元前3,000年程前から、セム族系の遊牧民達の幾つかがイラクへと移住を開始した。そしてバビロン（注2）に定住し、そこの諸事を取り仕切る様になるまで、数世紀も要しなかった。だがこれ等移住者達が、もし他民族をどの様に利用し、彼等を支配するかを理解出来る様な進歩の段階まで到達していなければ、シュメール人の様に文明を持った民族を強制出来る等という事は理解し難い。またこれに加えて彼等の母国語と文化的な多くの事象を長期間にわたって保持し続ける事等は了解し難いのである。

（注2）バビロンはイラクのアルハッラ県にある考古学的な遺跡を有する都市であり、バグダードの南方約210kmに位置する。私は1973年に彼の地を訪れた。そしてそこに「行幸通り」と名付けられたものを残存する遺跡の中に見出した。この通りは毎年春にバビロンの人々の行列が通過していた所であった。この通りの終着点に「イー（神）・マーハ」神殿がある。また町の西方にはバビロンの偶像神の一つである「イスタル（イシュタル）の門」と呼ばれるものがあり、「バビロンの獅子」の石彫像で北方は終わっている。この石彫像の頭部は、以前に言及した様に、イギリスの砲撃により胴体から分離してしまった。また前述の通りの北に、世界7不思議の1つである空中庭園の基礎の遺構がある。この基礎は焼き煉瓦で造られていたが、現在ではその一部分しか残っていない。一方その上にあった屋根や庭園は最早存在していない。

これ等の特徴を堅持し保持したことは、歴史的に5,000年前にアラビア半島からイラクへ到着したセム族（イエメン人）が、知的レベルの初歩的段階の民族であったのではなく、彼等が独特の文化を有した者達であり、組織を持ち、社会生活を営む者達であったことの証明である。

のみならず、古代エジプト人やメソポタミヤ（イラク）人達は、南方系アラビア人達の存在を彼等の到着前から知っていた。即ちこれ等イエメン人達は一方ではアフリカとインドを、また別な方面ではイラク、シリア、エジプトを結び付けていた存在だったからである。そしてこの事は一方のグループから他方のグループへの貿易運輸において、また古代宗教全般の崇拜のための基本的な物質であった乳香等のハドラマウトの産出品の輸送に関するものであった（注3）。

（注3）「イエメン、その過去と現在」 Dr.アハマド・ファフリー著 P.35

イエメン人達は彼等の貿易活動という理由により、世界貿易と連携し、相互に影響し合う経済組織を有していた。

この歴史的事実を否定せず、ドトルフ・ニールセン博士は、前述の自書『古代アラビア史』を締め括る最終章の中で次の様に語っている。「幸運なことに、アラビア諸国における世界的な貿易は、深遠な影響を与えている。

つまりこの事は、南部から北部（パレスティナやエジプト）まで浸透した交易路の恩恵によるものである。そして明白な事に、南アラビアに高層建築物を残した人々は、遊牧民のアラブ人でもなければ、ベドウィンでもなかった。アラビア半島が知識として得た共通の古代アラビアの生活様式は、未だに生き続けており、これ等の遺跡に対して特別な文化的価値を与えている」（注4）。

（注4）「イエメン、その過去と現在」 Dr.アハマド・ファフリー著 P. 45

〔イエメンの自然的特性〕

それに加えてイエメン人達は、彼等の国々の繁栄のために、自然の特性の数々に依拠していた。それ等のうち重要なものは次のものである。

三方から海に囲まれていること。その海とは、南はアラビア海、東はアラビア湾、西は紅海である。彼等はその事により、彼等が手中にし、そして彼等の支配下での陸上輸送の手段に加えて、海上輸送にも精通していた。

またイエメンでは、季節が来ると雨が規則的に降り、この事が彼等を助けた。彼等は山岳地区のあちこちにダムを建設し、民族的経済の屋台骨であった農業を発展させた。

またイエメン人達（彼等は天性の船乗りであったが）、彼等はパキスタンのインダス文明とバビロンやエジプトを、交易路や海運路を通じて結び付けていた。

或る国から他の国への文明の伝播のみならず、イエメン人達は文明化そのものにおいても役割を担っていた。そしてそれは恐らく、バビロンやエジプトその他の地域まで到達していたであろう。

同様に（注5）イエメン人達は、最も古い時代からアフリカの海岸へと渡って行った。中には商いをして、エルトリアやソマリアの居留地に定住する者もあったが、彼等は海岸づたいに港から港へとエジプトのクサイル（ルクソールのほぼ真東にある紅海岸の港町）に到達するまで進んで行った。そこからキャラバンはナイルへと荷を運ぶのだった。イエメン人達は海運に加え、陸運にも優れていたことから、彼らの居留地としていた所に商業の中心をおき、アラビア半島の中央や北方のキャラバン・ルート上に砦を築いた。

（注5）「イエメン、その過去と現在」 Dr.アハマド・ファフリー著 P. 35

彼等の国籍は、彼らの後を付いて来た。彼等はその新しい祖国で、マアーン人とかサバア人とかアウス人という名で知られていた。

この本の「ハバシャ（エチオピア）及びアフリカに於けるイエメン人の存在の歴史」章の中で、東アフリカ海岸にB.C.6世紀に定住したアウス族の存在を知るであろう。彼等はそこから南部海岸へ広がって行き、そこで独立した中央都市と政府の土台を築いた。それは彼等の本来の祖国イエメン、つ

まり南アラビアのイエメン諸政府との連絡を保っていることを意味した。

その独立した諸政府とはザンジバルの政府（注6）やハバシャのアクスウム政府（注7）等であり、ハバシャ北部のエルトリアやアラビア人の首長国であったソマリア等にも政府が置かれ、それ等政府はモハの民の名においてイエメンの指導者が君臨するものだった。この海岸線でのイエメンの影響力は、上述のアウス族の侵略に限定されたものではなかった。

（注6） 東アフリカのタンガニーカ海岸に面して、インド洋にあるザンジバル共和国、人口約50万人。首都ザンジバル。首都の人口は15万人を超える。1963年に独立。それに続いて翌年共和制を宣した民衆革命直後に、スルタンのハムシドを退位させた。同じ年、タンガニーカと統合した。

（注7） ハバシャのマグリイ県の遺跡都市。その残存する遺跡の詳細について、後に述べる様に筆者はその他を訪れた。

ニコラウス・ロドカニース博士は「古代アラビア史」という著書の中の「南アラビア諸国の一般的な生活」（注8）と題する章において次の様に規定している。「サバア人とヒムヤル人達（彼等は南部に現れた最後の国家を形成する）」の国が、紅海と南東方面に拡大していった。これ等の状況は、南アラビア諸国の幾つかがアフリカ北東部の地域を植民し、この方面の多くにイエメンの諸部族を定住化させる方向へと押しやった。

（注8） 本文中に記述なし

そして彼等が権力の所有者となるまでには、長い時間はかからなかった。そして彼等の軍事力は、自分達の祖国であるイエメン本土にまで、その権力を及ぼせる領域まで達した」（注9）。最後の一文において、彼はイエメンに対する第1回目のエチオピア人達の支配を指摘している。そしてこの事は、この本のそれに関するテーマで知ることになるだろう。

（注9） 初めてイエメンを攻撃してきたエチオピア人達が、イエメン系であったという事実を確認付ける多くの例証はしかるべき箇所にて。

イエメンとローマ

一方イエメンとローマ（注10）の関係はといえば、「イエメンの過去と現在」という本の幾つかの章に言及することで十分であろう。ここでは「イエメンとローマの間の最古の関係」という題（注11）で述べられている。

（注10） ローマ人とは、紀元前573年にローマ国家を建設した者達である。元の居住地はイタリアで、その後ヨーロッパやその他の多くの地域に広がった。

（注11） P. 69 本文中に書籍名なし

そのテキストによると「アレクサンダー大王は、アジアの幾つかの国を侵略した。そしてペルシアを

打破した後、人々は友情を取り結ぶ為に彼の元へ急ぎ、そして自国の友好を進言しながら、彼に贈り物を送った。

しかしアラビア半島の住人はその中にいなかった。アラビア半島の住人達はその事を拒否したのであった。そして彼等の活動は、アレクサンダーに影響を及ぼし、彼は彼等の国を侵略すると言って、彼等を脅迫したのだった。しかし彼は自分の言った事を実現する前に死んでしまった」

また、次の様に付け加えている。

「そしてその後ローマという星が昇り始め、やがて彼等の足場をエジプトとシリアに固めた。そしてインドの産物を運ぶために紅海での商業活動に力を入れ始めた。しかし彼等は、アラビア半島南部のアラブ人達を手強い競争相手と見做していた。即ち陸のルートの商業は、アラビア人達の手握られ、彼等の思うままに支配されていた。彼等はまた危険で、ローマの水夫達が、マンダブ海峡（注12）を通過したり、幾つかの港に艇泊する時に、十分考慮に入れなければならない様な、決定的影響力を持つ競争相手でもあった。

（注12） パープルマンダブ海峡及び紅海は古代世界貿易の大動脈であり、経済・軍事・政治面でアラビア半島に特別な重要性を与えていた。海路、陸路共々イエメン人の手から奪い取らんとするローマ人総督ユリウス・ガレリウスを初めとするローマ人達の試みが、イエメン侵略へと駆り立てた一群の動機の一つだった。しかしながら最初から分かっていた様に、それは失敗に終わった。

そこでエジプトにいたローマの支配者（ユリウス・ガレリウス）は、ローマの同盟国であったナバタイ（注13）の支援を受けて、アラブ人の国を侵略したいと思った。彼はナバタイの首領サーリユスと10,000の兵から成る兵隊を伴ってイエメンへと進軍を開始した。兵士達の内1000人はベドウィンで、500人はユダヤ人であった。

（注13） アラブ・ナバタイ人達とは、ヨルダン東部を居住地とするベドウィン部族であった。その中に紀元前6世紀にヨルダンのエドム人達の地に移住した者達があり、そこでナバタイ王国として知られる有名な遺跡の町、ヨルダンのペトラを首都とする王国を築いた。ナバタイ人達の王国は、ヨルダン・パレスチナ・シナイ半島・ヒジャーズの一部を含有した。その遺跡の中には、ダマスカスとアンマンの途中にあるヨルダンのジェラシの町がある。私も訪れたが関心に値するところである。歴史家達の中には、ナバタイ人のアラブ性を否定する、違った意見を持つ者も何人かいる。

またこの軍隊には、有名なローマのギリシャ人地理学者・歴史家ストラボーン（B.C.64～A.D.23—小アジアのアマセイア生まれ）が同伴した。彼は攻撃軍の将軍、即ちユリウス・ガレリウスの親友であった。これは紀元前24年の出来事であったが、ストラボーンの残した記述から我々は次の様な事を知る事が出来る。

つまり、ローマ人兵士達は、彼等の内多くの者が、死に至る様な困難に晒された。彼等はナジュラーンへ辿り着くまでに6ヵ月以上もかかり、そしてそこから更に、マアリブへ向かうことを欲した。そし

てそこで、ローマの野心を粉々に粉砕してしまう様な戦闘が起り、彼らは退却をせざるを得ない敗北を喫した。そしてエジプトへ到達することが出来た少数の者達はひどく疲れ切って、そこへ（エジプト）帰還したのであった。

イエメンとエチオピア

イエメンとエチオピアの関係については、前述のニコラウス・ロドカニース博士の「イエメンと多國間の歴史的関係」の章の最初に加えて、私達はニールセン博士がエチオピアについて次の様に語った事を思い出す（注14）。

(注14) 「古代アラビア史」 P. 31

「エチオピアの国に遺跡と文化を残し、現在までエチオピアに存在しているセム族系の者達、彼等こそが元々の住民を構成しているオリジナルの人種であり、のみならず彼等は北セム族以外の様に思われていたが、実は南アラブの国からエチオピアに移住してきた人々なのである。それ故、アラビア語の中に保持されている（激烈な）要素が幾つか入って来たにもかかわらず、彼らの言葉は南アラビアの方言と同じであり、今日もアラビア語に近いものを話し続けている。

「言葉や、書き方、文化については、当初より、サバア王朝のものである。何故なら、南アラビアからの移住者達は、歴史に登場している時期、即ち紀元前数世紀前からその国（エチオピア）に移住して来た。後に彼等は南アラビアの国々を西暦6世紀に植民地とし、服従させることとなるエチオピア王国の土台を築いたのである」。

ところでニコラウス博士は、このテーマを再度取り上げ次の様に述べている。

「特筆すべきは、当時南アラビア文化が存在したということ。そして後に、南アラビア方言が、アビシニア国という名で知られることになるアフリカ大陸の一部に広まっていたこと。以上の点から我々は、南アラビアの諸国が、アフリカにまで分け入っていたということ、そしてそこで新しい国を築き上げようとしていたことが分かるのである」（注15）。

(注15) 「学問史と論稿を巡る見解」 この1章は、フワード・フスナイン・アリー博士が、他に内容の異なった3章分と併せたもので「古代アラビア史」という書物の中の最終章として扱っており、そのP.114からの引用

又、イエメンとアビシニア及びアフリカとの関係、そしてその影響について、ニコラウス博士が述べていることに関し上述の書「古代アラビア史」の中の「南アラビアの諸国に関する考古学的側面」（注16）という題の最終章で、アドルフ・ジャルマー教授が述べているがその内容はこうである。

(注16) P. 150

「これ等、グラツェル・ハーリーフィー、ベント等の諸氏のお蔭で、一般にセム系文明に関した南アラビア文明の重要性と価値とを我々は明確に出来た。またアクスム王国発掘を目的としたドイツの調

査隊は、オットー・リットマンを団長に、エチオピア皇帝メンレケⅡ世の後押しで、1906年大量の発掘品を見つけることが出来た。学者達は世界が待ち望む大きな期待感を強烈に感じた。学者達に対してチャンスが与えられた折に、ハバシヤ王国という名で知られるこの国を植民地化した部族達の本来所属していた祖国の宝を発見したのだった。発掘品の所属年代は、西暦2世紀から5世紀にわたっていた。

ニールセン博士は、前述の彼の章（注17）に戻り、そのテーマをイエメンの文明とエチオピア及びアフリカの文明との繋がり、そしてそれら二つの文明に及ぼしたイエメンの文明の影響という側面から、テーマを取り上げている。そしてこう述べている。

（注17） P. 33

「エチオピアの遺跡は、南アラビアの国々で発見された程数多くはない。にもかかわらずエチオピアの国々は、今日では非常によく知られ、南アラビアの国々について我々の手にある〔知識〕よりも、ずっと明確になっている。何故なら南アラビアの国々における政治的混乱が原因となり、しばしばこの混乱は、まず何よりも前に安全と秩序（が確保されること）をメンバー達が要求しているために、アカデミックな派遣団を送ることを妨げる事となった。

またこう付け加えている（注18）「我々はこのエチオピアの遺跡を通じて、古代エチオピア文化の歴史における様々な時代を区別することが出来る。そして我々の元にあるものとして最も古い刻文はサバアの言語と書体の刻文であり、凡そ紀元前1千年中ごろに遡るものである。

（注18） P. 33

この時代からは石の断片が我々にもたらされている。それはアクスーム町の近くにあるアルアンバーウ・バントゥルーン山の頂上に立っている教会の壁の中に保存されていたものである。そしてこの石は、未だに幾つかの壁に現存し残っていて、サバアの神聖な場所について語っている。

そこにはサバアの神ザートゥ・バアターン（注19）について言及されている。また同様にアドワの東のヤヒには、何本かの柱が残っている。それらはシン神（注20）のためのサバアの神聖な場所があったと言う明確な証拠を示している。

（注19） 古代サバア王朝イエメンの女神。彼女の為にサバアの王カルブ・アール・クトルが、イエメン神殿を建立した。

（注20） ハドラマウトのシン神殿

同様に南アラビアの神イスタル（イシュタル）（注21）を祀るためのサバア王朝の彫刻の一部や、エチオピアのアクスーム王朝時代に見つかった遺跡や神殿について、ニールセン博士が述べているものに至るまで発見された。そしてそれら全てはサバア王朝のものである。

（注21） サバアのイスタル神殿

ニールセンはまた次のように付け加えている（注22）。「アフリカにいたこれらの南アラビア系セム族達は、キリスト教の初期にアクスーム王国の設立に成功している。この国はギリシャの影響を受けていたが、紀元後約4世紀に母国への道を見出している」。

(注22) P. 34

つまりこの事は、母なる国イエメンに対するエチオピア人達の侵略を意味していた。侵略者達はイエメンからアフリカに移住したイエメン人達の子孫であり、前述した様にエチオピアにアクスーム王国、また他の地方に諸王国を築いた。

アハマド・ファフリー博士は、前述の自書「イエメン、その過去と現在」の「イエメンとエチオピア」（注23）と題する章において次のように述べている。

(注23) 「イエメン、その過去と現在」 Dr. アハマド・ファフリー著 P.70

「紀元後1世紀、アフリカの「コウシュ」（注24）において、イエメン人やハドラマウト人達の幾人かが定住し、そこでエチオピア文明の基盤を築いた。そしてその地方において、ザンジバル（黒人）の諸部族の間で重要性を持つに至ったエチオピア王国を築き、そしてヒムヤル系の文明を持ってイエメン人達はエチオピアへと渡って行き、アクスーム王朝が芽生えることと成る種子を植え付けた」

(注24) 研究者達にとって古代コウシュの土地は、紅海の西南海岸全域を含んでいる。即ち、ソマリア、エリトリア、エチオピアを指す。

また付け加えて、「この時期以来、エチオピアとイエメンの絆は絶たれることはなかった。のみならず彼らの言語及び書体は、移住時にイエメン南部において広まっていたヒムヤル系のものであった。

また次の様な可能性がある。即ちイエメン人達のエチオピア移住は、ヒムヤル王国の内部的混乱の直後であった。王の座を求めた一人が、これらの移住者達の長であった。もしくは或る王が或る王を打ち破り、敗北した王がエチオピアに移住した。即ちこの事は、新興国のアクスーム王国の諸事が安定していたが故の事であった。

そして紀元後2世紀にエチオピアがその視線をイエメンへの侵略へと向け始めた。そして最終的にこれらの王達の名称は次のようなものになった。それは「アクスーム・ヒムヤル・ライダーン、サルヒーンの王」であった」

これはつまりアクスームと言うのは考古学的な町で、我々が知っていた様に、イエメン人が造ったかつての古代エチオピアの首都であった。今で言えば、エチオピア（以前はハバシヤと呼ばれた）の州の一つであるマグリー州にある。

1968年に私はエチオピアを訪問した際に、アクスームに立ち寄り、残っていた遺跡の中で最も貴重なオベリスクの写真を何枚か撮影してきた。そこにあった中で一番大きなオベリスクは倒れていたが、エチオピア人達はその柱や石をバラバラにすることなく、真の姿を倒れていたままで保存していたのであった。

またニールセン博士は「北アラビアの国々」の章（注25）で、北と南の文化比較論で、外国の影響から南の文化が独立した事を強調し論じている。

(注25) 「古代アラビア史」 P. 39

「南アラビアの文化は、住民が多く住んでいる地域に限られ、イスラーム以前の全ての国をまとめて見たものの中で最大と考えられる国家がそこに存在していたと言えるだろう。それはなぜかと言えば、南アラビアの諸部族は、諸事一般、例えば独自の言葉（方言）、独自の文字、独自の公式な宗教などを統一し、国家を形成することに合意していたからである。

この文化は、北部や北東部に広がる広大な砂漠と、紅海に沿って広がる砂浜のティハーマがあったおかげで、外国の影響を受けることのない純粋なセム文化として育っていった。そのため遠いエチオピアの高い山々の山頂に、我々は統一された大国に存在するセム文化を見つけることが出来た。そしてこの南アラビアの姉妹国は外国の影響から、純粋で清らかなまま存在していた。それはエチオピアとイエメンが、国際的な古代世界の二大国家、一方はバビロニアとアッシリアから、もう一方は地中海の覇権国家エジプトから離れていたからである」。

ニールセン博士は、またアラブ諸国の北部及び中央で発見された刻文について語っている（注26）。

(注26) 「古代アラビア史」 P. 52

それは即ち南アラビア諸国の遺跡や、それもまた南アラビアである古代ハバシヤ（エチオピア）の遺跡が、我々に明かした文化の残した軌跡である。そしてこのような例証は、同時にフェニキア人達の都市でもあったカルタゴの刻文の例に見られる。即ちカルタージナ（注27）つまりカルタゴはアフリカでのフェニキア人達の植民地であり、同様にハバシヤの状況はと言えば、アフリカ大陸における南アラビアの植民地なのであった。

(注27) カルタゴはチュニジア沿岸のフェニキアの町でB. C. 840年に築かれた。カルタゴとは「新しい町」の意味。ローマ人とカルタゴ人との長い戦争（ポエニ戦争）の後、A. D. 410年にローマ人によって焼き払われた。

ニールセン博士は、北部文明に対する南部文明の影響についても語り、次ぎの様に述べている。

「古代南アラビア文明、それは北セム族の優れた農耕文明の先行段階とか準備段階といった用に考慮されている。だが我々はその中に見出す上述の文明の根源に立ち返らなければ、認識することの不可能な側面に関し、複合的な視点からの別の考察の必要性がある」

イエメン人の血統と居住地、及び幾つかの遺跡についての概略

この章の主題の核心に入る前に次の事柄について学んでおくことは、我々にとって有益である。

(1) この章が包括しているイエメン人の血統は、決して考古学的文書が示唆しているものではない。私はそれについてアブー・ムハンマド・アルハサン・ブン・アハマド・アルハムダーニー氏の著書「アルアクリール」の第3巻目の第1章、2章、10章に依拠した。

これらの章はすでに印刷が終了しているものである。

第1章は、ナシブ・ギターア・アルヒムヤリーの血統を含み、第2章はそのうち、ヒムヤル・ブン・サバアの血統を含んでいる。そして10章は、カフラーン・ブン・サバアの血統を扱っている。

また第8巻目には、幾つかの遺跡について書かれているが、これはカーディ（法官）のフセイン・ブン・アハマド・アルシャーギーが「イエメンの遺跡の概略」と言う彼のブックレットの中で言及しているところのものである。

またアルハムダーニー氏は「アルアクリール」において、地方行政府で彼が伝聞した事柄や系譜学者たち、そして彼がしばしば取り扱った記録などに依拠している。

(2) この章が包括している場所について、その殆どのものがそこで言及されているイエメン人達の居住区からのものであるが、彼らに関連するもの、あるいは彼らの名前の呼び方に依拠している。

この章の中では、アルハムダーニー氏の著書である「アラビア半島の性質」、そしてカーディのムハンマド・ブン・アハマド・アルハジャリーの「写本全集」、フセイン・ブン・アリー・アルワイシーの著作である「大イエメン」、私の師であり偉大な歴史学者でカーディのムハンマド・ブン・アリー・アクーウによる調査（これは既に刊行され、アルハムダーニー氏やそれ以外の学者諸兄の著作の中で検討されたものである）、そしてまたアクーウの著作「緑のイエメン」に依拠している。

(3) この章において、イエメン人達の血統及びその居住区、また彼らに関係ある居住区、また彼らの名称の呼び方についての由来について私が言及していることは、血統に関し著名なものとその子孫が今日まで知られ残っているものに対してである。

また彼らに関連していることで知られている居住区や彼らの名前の呼び方の由来について、この章の中で言及していることがそれらを包括的に規定しているものではない。

(4) 故にこの章の中で血統とか彼らの名称について言及していることに関する出典は、考古学的な記録ではない。イエメンの遺跡に対する科学的・包括的調査が、アルハムダーニーが言及していることや彼以外の歴史家や系譜学者で、伝聞したり聞き取り調査に依拠したものが言及していることに対して、修正する可能性があることは確実である。

(5) アルハムダーニーは、以上のテーマに触れた後で、イエメンの何人かの子孫たちとその居住区について解明している。従ってこの件に関しては、本章においては看過するわけには行かないテーマである。定義付けと解明に関するアルハムダーニーの補足説明に対して、私は「アルハムダーニーはこう言葉を付け足している」と言い添えることにした。こうして示唆に富ませるために、私は彼の表現を引用していくことにし

たのである。

(6) 本章ではわが同胞のカーディであるフセイン・ブン・アハマド・アルシャーギー氏の「イエメンの遺跡の概略」と言うブックレットに沿って、イエメンの遺跡が豊富な場所について解き明かされることになる。この小冊子はアルハムイダーニーの著「アルアクリール」の第8巻目、そして同じ著者による他の文献、及び同氏以外の文献、その他聞き伝えられたものや、折に触れて読まれたもの、更には幾つかの観察記録を参考にしているものと思われる。

(7) 以上に加えて本章では、地理学的見地からイエメンの自然と政治的行政区分に関しての様々な特異性、及びその関連諸地域とを包括している。従って本章自体がこのような地理学的見地に立っている以上、これは極めて重要で有益になることであろう。

以上の観点に関する歴史家達の見解に拠れば、以下の系譜が大変参考になるとと思われる。

即ち、ノアの子はセム、セムの子はアルパクシャド、アルパクシャドの子はシュラ（アラブ名シャリーフ）そしてシュラの子がエベル（ユダヤ人の先祖）で、更にエベルの子がカフターン（訳者注：旧約聖書中のヨクタンのことか？）である。そしてこのカフターンがイエメン人達と密接にかかわって来る直接の先祖である。

そしてカフターンの子はヤアリブで、ヤアリブの子はヤシュジャブ、そしてその子はサバアで、サバアの2人の子がカフラーンとヒムヤルでここから更に系譜が続くのである。

第3～4章 「イエメン概説史」 第1巻P. 37-52